

『シャンパンゴールドで抱きしめて』

著:南原 兼 ill:明神 翼

「……話って、なんだろう？」

かかえた膝に顔をうずめながら、直弥は一人つぶやく。

直弥が、ヒイラギのメインスポンサーである柊コンツェルンの御曹司でなければ、解雇を申し渡される覚悟をすべきなのだろうが。

王芽は、どんな罰を与えるつもりなのだろうか？

直弥は、それ以上考えることを放棄して、よろよろと立ちあがった。

いくら時間をかけても、王芽の本心など、読めるはずがない。

気紛れなシルバーストーンの空みみたいな男だ。

うらかな笑顔の奥には、危険な罠が潜んでいる。

冷やかなまなざしで人の心を凍らせた次の瞬間には、熱い吐息で躰の奥まで融(と)かしてしまう。

普段でさえ惑わされてばかりなのに、どこかいつもと違う今日の王芽の考えていることなど、わかるわけがなかった。

雨雲の切れ間から射す光の輪の中で、王芽の背中に見えた大きな漆黒の翼。

目を閉じると、その美しい翼はまばゆい光に包まれて、次第に白く色を変えてゆき、やがて灰のように粉々に砕け散ってしまう。

直弥はあわてて腕を差し伸べ、消えてゆく幻を抱きしめた。

「あ……」

瞳を開き、宙を虚しく掻きいでている自分に気づく。

直弥は、そのまま両腕に力をこめて、自分の躰を抱きしめた。

別れたくない。離したくない。

躰中の血が、細胞のひとつひとつが、王芽をこんなにも欲しがっている。

それなのに、なぜ、ハデスの腕に抱きしめられながら、王芽との過去も未来も捨ててしまいたいなんて考えてしまったのだろう。

引き潮と満ち潮を繰り返すように、愛しくなる、憎くなる。

二人の心と躰に埋めこまれた磁石は、渋滞のハイウェイのブレーキランプがまたたくように気紛れに弾き合い、惹かれ合う。

きっとこの苦しみは、地球が壊れるその日まで続くに違いない。

涙と笑い声が、同時に零れる。

楽になろうなんて、考えたのが間違いだった。

直弥は、寄りかかっていた扉を片手で押して、服を一枚ずつ脱ぎ捨てながら、バスルームへ向かった。

シャワーを頭から浴びて、オレンジの香りの泡まみれになりながら、ハデスの香りを念入りに洗い流す。

けれども、メイプルの香りが溶けこんだ、胸を疼かせる甘い雨の匂いまでは、洗い落とせなかった。

雨音に似たシャワーの響きを聴きながら目を閉じると、王芽に別れを告げて半日ももたずに抱かれた、昨シーズンのソールズベリーのホテルを思い出す。

あのとき王芽は、許しもなくバスルームに入ってきて、着衣のまま直弥を抱いた。

自分が濡れるのもかまわずに……。

あの日のように、今にも王芽がバスルームのドアをあけて姿を現わすのではないかと、胸を高鳴らせながら待っている自分に、直弥は思わず苦笑した。

(ずるいな、俺は)

自分から攻めこんでいこうとはしない。

逃げるときの口実がなくなるから。

けれども、王芽も、それ以上にずるい。

人の躰と心が無理やりこじあけておきながら、その先は追ってこいと、意地悪に身を離す。

かけひきを仕事にしているだけに、お互い無駄に競い合ってしまう。

(レースみたいに、それを楽しめればいいのに……)

直弥は、シャワーをとめると、深いため息をついた。

恋は、レースのようにはいかない。

アクセルとブレーキのタイミングすら、わからない。

レースよりもずっとテクニックがいる。

「どうすれば、あの人に勝てるんだろう？」

柔らかなバスタオルで躰を拭い、新しい下着と目に痛いほど鮮やかな真紅の長袖シャツを素肌にまといながら姿見の前に立つと、直弥は、昨年よりだいぶ大人びた鏡の中の自分に問いかけた。

勿論、答えなど返ってはこない。

「勝つまで、闘い続けるしかないんだろうな。負けたくなければ」

恋に勝ち負けは、やはり存在すると思う。

負けているという自覚があるから。

心の底から王芽に心酔している。……それもずっと昔から。

にもかかわらず、ハデスの誘惑に流されそうになったのは、王芽がちゃんとつかまえていてくれないせいだ。

そんなふうには王芽を責めることができるならば、少しは勝算もあるだろうが。

残念ながら、直弥は、自分の脆(ぜい)弱(じゃく)さがすべての原因なのだと、痛いほどに自覚してしまっていた。

「もう一度、ちゃんと謝ろう」

王芽も蒸し返されるのは嫌だろうけど、仕方がない。

直弥は、細身の黒いデニムに足を通して、ウエストのボタンをとめると、ふたたび大きく肩で吐息をつき、部屋を後にした。

廊下へ出た直弥は、ちょうど王芽の部屋から出てきた夏人と目が合い、足をとめた。

(どうして、久我が?)

冷静になろうと思っても、嫉妬心があらぬ想像を掻き立てて、知らず握りしめたこぶしが、小刻みに震えた。

こんなことで動揺しているなどとは、夏人には絶対に知られたくないのに。

夏人が王芽に想いを寄せていることは、傍(はた)目(め)にもわかるほどで、当人もそれを隠す気がないのは明白だった。

スタッフの前では、素直でさわやかな好青年に徹している夏人だが、人目のない場所では、直弥へのライバル心を剥(む)き出しにしてきた。

王芽の部屋の前に立ってこちらを見ている夏人の、敵意を丸出しにした視線に捕まり、思わずUターンして自室に逃げ戻りたくなる。

だが、ヒイラギのファーストドライバーとして、さらには王芽の恋人としてのプライドが、直弥にそれを許さなかった。

そのまま無言で進んでゆくと、直弥は、夏人を無視して、王芽の部屋の扉をノックしようとする。

しかし、指が扉に触れる前に、直弥は夏人に手首をとらえられていた。

「離せよ」

邪魔をするその手を払いのけようとしながら、直弥は、夏人をにらみあげる。

けれども、夏人は、強い力で直弥の手首をつかみあげたまま、声をひそめて耳打ちした。

「早乙女さんに迷惑かけるなよ」

「迷惑って？」

「自分の胸に訊けばわかるだろ？ 心当たりがありすぎて、わからないとかいうんじゃないかなければ」

侮(ぶ)蔑(べつ)に満ちた夏人のまなざしに、直弥はカッと血がのぼる。

(まさか、王芽がハデスの一件をこいつに？)

直弥は半信半疑で、王芽の部屋の扉と眉をひそめている夏人の顔を交互に見比べた。

「いい加減、甘えすぎ」

直弥の耳元に唇を寄せて、夏人はささやく。

「スポンサー様の御曹司だから、そのくらい当然って思ってるんだらうけどさ。早乙女監督がかわいそうだろう？ ただでさえ、きみの姉さんのしょうもない小言を聞かされて、うんざりなところに、身勝手な坊やのおもりまで押しつけられて」

(こいつは、なにを言ってるんだ？)

自分ばかりか、オーナーである姉の姫香まで非難されて、直弥は目の前が暗くなる。

思わずよろめく直弥に、夏人は、冷やかな視線を投げただけで、容赦なく告げた。

「これ以上、あの人を苦しめないでほしい」

まるで自分のほうが、王芽の気持ちを理解しているとでも言いたげに。

(王芽の恋人は、俺なのに……)

言葉を失くしたままの直弥を横目で見やりながら、夏人は苛立たしげにため息をつく。

「俺もそろそろ我慢の限界かも。いいタイムを出しても、きみがいる限り、ここではセカンドどまりだし、来シーズンは早乙女さんと一緒によそへ移籍するのもいいかなって」

「移籍？」

呆然と繰り返す直弥に、夏人は勝ち誇った笑みを向ける。

「そう。彼も、もうきみにふりまわされるのはごめんだってさ」

夏人はささやくと、つかんでいた直弥の手首を、用済みとばかりに突き放した。

「シーズン途中で捨てられるのが嫌なら、移籍の話は、オーナーには、内緒にしておいてくれよな」

夏人は釘を刺すように耳打ちすると、直弥の肩をなれなれしく叩いて、去ってゆく。けれども、直弥は、夏人の無礼を責めることさえ忘れて、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

本文 p95～103 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>